早稲田大学大学院教育学研究科　博士学位請求論文　概要書

日本語感覚表現語彙の歴史的研究

―嗅覚を中心に―

池上　尚

本研究は、語彙体系論の立場から、中央語を中心とした日本語嗅覚表現語彙の史的変遷（古代～近現代）を考察し、日本語感覚表現語彙における位置づけを明らかにするものである。これは、(一)嗅覚情報の性質・状態を言語化するためにどのような語彙が必要とされてきたかという、日本語の表現法の歴史を記述する研究であり、また、(二)嗅覚表現語彙がどのような事物・物事の描写に使用されてきたかという、日本語の思考・発想法の歴史を記述する研究である。また、(二)に関連して、ある嗅覚表現語が（嗅覚表現語以外の）どのような意味分野の語と類義関係を結ぶかという点にも注目し、嗅覚表現語彙の共時的な意味領域の広がりについても言及する。

論文の概要

論文は、序論・本論・結論から成る。以下、順にその概要を述べる。

序論

第一章　研究の目的と意義

嗅覚表現研究史を概観した上で本研究の目的と意義を明らかにした。

従来の嗅覚表現研究は、古代におけるニホフ・カヲルの意味（感覚領域）の変化を追究することから始まり、視覚などと比較対照されながら、嗅覚とは何か、嗅覚情報とは何か、といった抽象的な議論へと進んできた。そうした一知覚としての嗅覚の特殊性に注視した研究であったために、視覚表現との重なりが問題にならない（と考えられた）ニホフ・カヲル以外の他の嗅覚表現語の意味・用法については十分に論じられてこなかった。その結果、嗅覚表現語彙全体の広がりは、通時的にも共時的にも知り得ないのが現状である。

本研究の目的は、先行研究において看過されてきた嗅覚表現語彙の通時的・共時的な広がりを考察の対象とし、この語彙が担う意味分野の全貌とその史的変遷の究明である。すなわち、嗅覚表現語彙に属する各語の歴史を扱う語史研究でもあり、語同士の関係の歴史を扱う語彙史研究でもある。語史研究としても語彙史研究としても価値の高い分野語彙は必ずしも豊富ではないと言われるが、嗅覚表現語彙は、これに属する形容詞・自動詞の多くが語史としての価値を有し、それらを総合した語彙史としての価値も有する理想的な分野語彙であると筆者は考える。本論における考察を以てその主張の論拠を示していく。

また、本論では嗅覚表現と他の感覚表現との繋がりから感覚表現語彙における嗅覚表現語彙の位置づけを検討する。これにより、いまだ総合

的な研究が行われていない感覚表現語彙の歴史的研究の第一歩となると考える。このように、本研究は、語（彙）史研究としても感覚表現研究としても意義を有するものである。

第二章　研究の方法と手順

主に、調査語の選定、意味の認定、調査資料について述べ、研究の方法と手順をまとめた。

調査語の選定は、「(一)嗅覚情報の性質・状態を言語化するためにどのような語彙が必要とされてきたか」という研究の目的に応じて行った。すなわち、傍線部の典型である形容詞、それと類似した働きをするとされる知覚の自動詞である。『日本国語大辞典（第二版）』に見出しのある嗅覚表現形容詞・自動詞を参考に、現代語においても使用が認められる語を中心に選定した。その結果、本論第一部では快形容詞からカグハシ・カウバシ・カンバシ（第一章・第二章）、第二部では不快形容詞からクサシ・モノクサシ（第三章）、～クサシ（第四章・第五章）、第三部では自動詞ニホフ（第六章）、ニホフの連用形名詞ニホヒ（第七章）、第四部ではカヲル（第八章）、クンズ（第九章）などを代表として取り上げた。

意味の認定は、二側面から行う立場をとる。すなわち、いわゆる意味である対象的意味とは別に、文体的意味を認めるという見方である。

対象的意味は、語の統語環境（語が対象とする事物・物事）から判断した。対象は、具体的な事物と抽象的な物事とに大きく分け、前者はさらに、植物（草木／花）、薫物、飲食物、風、身体（美しさ／超越性）、気（精彩・煙霧）、穢れ、その他に細分類した。また、対象的意味を把握するより大きな枠組みとして、状態・感覚・評価・情意という四つの観点を設けた。

文体的意味は、文章語・日常語・俗語という三つを想定し、語の出現する文体からいずれに相当するかを判断した。まず、日常語はどのような伝達様式（音声言語／書記言語）、言葉遣い（文語的／口語的）であっても現れる文体的意味と考える。次に、俗語は、音声言語資料に現れやすく、また、書記言語資料中の〝書かれた話しことば〟にも現れる可能性のある文体的意味と考える。そして、文章語は、漢文や和漢混淆文のうち文語文要素の強い言語資料（あるいは部分）に現れやすい漢語系文章語という文体的意味と、韻文や擬古文に現れやすい和語系文章語（雅語）という文体的意味との二つに分けた。

調査は、韻文散文の別なく、上代から近世までに成立した約七〇〇の言語資料を対象とした。また、必要に応じて近現代に成立した言語資料

も調査対象に加えることにした。

本論

本論は四部から成る。第一部・第二部では形容詞を、第三部・第四部では自動詞をそれぞれ取り上げた。

第一部　形容詞Ⅰ　カグハシとその転化形における別語意識の成立

第一章　カグハシ・カウバシ・カンバシの意味・用法分担

―原形・転化形の共存過程―

カグハシとその転化形であるカウバシ・カンバシを取り上げ、プラスの評価性を有する嗅覚表現形容詞の史的変遷を考察した。まず、原形カグハシは古く上代から見られるものの、中古にはその第二音節が鼻母音化したカウバシに取って代わられ、以後近世期までカウバシの独擅場が続いたこと、そして、中心的な嗅覚表現形容詞であったカウバシが中世前期には〈燈火の焦げる快いにおいがする〉さまを、中世後期には〈飲食物の焦げる快いにおいがする〉さまをも表すようになったことを明らかにした。一方で、近世前期には、カグハシのもう一つの転化形であるカンバシが、撥音を含むというその音声的特徴から、漢語のような印象を与える文章語としての表現価値を見出されるようになったこと、近世中後期には、それまで姿を消していたカグハシが文章語（雅語）として復活するに至ったことを指摘し、これと同時進行的に、カウバシの〈飲食物の焦げる快いにおいがする〉さまを表す語としての意味の限定化が生じたことを述べた。さらに、近代には、カグワシイが文章語（雅語）として〈快いにおいがする〉さま全般を表す語へ、コウバシイは専ら〈飲食物の焦げる快いにおいがする〉さまのみを表す語へ、カンバシイは否定表現を伴う評価形容詞として〈良くない〉さまを表す語へとそれぞれの意味・用法を確立したことを確認した。

第二章　成句「栴檀は二葉より―」述語部分の史的変遷

―カウバシからカンバシへ―

成句「栴檀は二葉より―」に注目し、この成句の述語部分におけるカウバシ・カンバシの交替が、近世期に開始し、明治期から大正期にかけ終了したことを明らかにした。その過程には、二語の交替のみならず、述語部分に二語以外を使用したり、述語部分を省略したりするなど、表現に様々な工夫を凝らす場合のあったことも確認した。そして、こうした成句における二語の交替には、第一章で明らかにしたカウバシ・カン

バシの意味・用法の確立（カウバシの意味の限定化、カンバシの評価語化）が影響を及ぼしていたと考察した。これにより、日常語における言語変化が及びにくいと考えられている文章語に属する成句において、「栴檀は二葉より―」は日常語の変化を反映した稀少な例と考えられることを指摘した。

第二部　形容詞Ⅱ　～クサシ語彙の担う意味領域の展開

第三章　クサシの意味とモノクサシの意味―嗅覚表現から性向表現へ―

クサシとモノクサシとを対照させながら、両者にほぼ同じ意味変化が認められることを明らかにし、モノクサシはクサシの派生語であったと主張した。ただし、クサシにはない独自の意味を発生させているモノクサシについては、モノ＋クサシの一語化が進んだ語であると考えた。

まず、クサシは、本来の意味である〈不快なにおいがする〉が抽象化することにより、単なる《発散》を意味する〈不快な気・感じがする〉という段階が生じる。そこから、「気・感じ」の不確実性、「不快」というマイナス評価の一致を共通項にして、〈事実・真相ははっきりしないが悪い気・感じがする〉という、〈怪しい・疑わしい〉の比喩的転義を派生させたのであった。一方で、〈不快な気・感じがする〉のマイナス評価の側面が強調された、〈気・感じが不快だ（甚だしい）〉という〈わざとらしい〉の比喩的転義も派生させることになった。

モノクサシは、如上のクサシの変化とほぼ同じように意味を拡大していった。また、それとは別に、〝〈不快な気・感じがする〉ために〈気が進まない〉〟という不快感の連鎖からくる独自の意味を獲得した。こうした自己の描写に使用されるモノクサシにやや遅れて、他者が〈気が進まない〉ように思われる様子にもモノクサシが使用されるようになり、原因・理由もなく〈気が進まない〉ように見える、つまり、〈不精である〉という人間の性向を描写する語と変化していったのである。

第四章　接尾辞 - クサシの意味と上接成分の拡大

―においから雰囲気へ―

第三章で扱ったクサシに関連して、接尾辞 - クサシを取り上げた。まず、- クサシを通史的に観察した場合、上接成分の種類により六つのタイプに分類できることを明らかにした。すなわち、Aクサシ（物質の変化を表す動詞の連用形・具体名詞を上接）、Bクサシ（具体名詞とも抽象名詞とも解釈可能な身分・立場・場所を表す名詞を上接）、Cクサシ（抽象名詞・形容詞語幹・形容動詞語幹を上接）、A′クサシ（形容詞旨シ語

幹を上接）、C′クサシ（動詞照レル連用形を上接）、文末外接形式（句を上接）の六つである。そして、-クサシの基本的なタイプであるAクサシ・BクサシCクサシの三つがこの順に発達してきたことから、-クサシに嗅覚表現から感覚表現への一般化（〈～の不快なにおいがする〉から〈～の不快な雰囲気がする〉へ）が生じたことを指摘した。これは、においも雰囲気も《発散》という共通項を有する「気」の下位分類であるために生じる意味の抽象化である。また、A′クサシ・C′クサシという特殊なものの誕生から、-クサシにマイナス評価の後景化（〈～のにおい／雰囲気がする〉）が起こったことも明らかにした。これにより、-クサシの意味の抽象化に二方向が認められることを主張した。そして、～クサシ語彙における〈焦げる不快なにおいがする〉さまを表す～クサシの多さについても指摘した。

第五章　水クサイの意味変化―江戸俚言水ッポイとの共存過程から―

第四章で扱った接尾辞-クサシの結合例のうち、一見、嗅覚表現に思われない水クサイに着目し、語史を個別に記述した。水クサイは、酒から〈水の不快なにおいがする〉こと、つまり、〈水分が多く（酒本来の）味が薄い〉さまを表す味覚表現形容詞として中世前期末に誕生した。近世前期に至ると、抽象的な物事である人物の行為に対して〈情愛が薄い〉さまを描写する感情形容詞としても使用されるようになった。しかし、中央語が上方語から江戸語へと移り変わる際、水クサイは〈情愛が薄い〉という側面のみが江戸語に伝播し、〈水分が多く味が薄い〉は江戸俚言水ッポイや甘イ・薄イなどの類義語の存在により江戸語の味覚表現語彙から拒否されることになった。水クサイが本来「水（分量）」に注目する語であったことを踏まえると、同じく「水（分量）」を描写する語であった水ッポイが、味覚表現語彙における競合の中で最も意識された水クサイの類義語であったと考えられる。そして、その結果、中央語としての水クサイは、味覚表現形容詞から感情形容詞への変化が認められるのだと結論づけた。

第三部　自動詞Ⅰ　ニホフに見る両極の評価性の獲得

第六章　ニホフの意味の下降

―自動詞的用法［名詞＋スル］との共存過程から―

ニホフと、知覚の自動詞と同じ働きをする自動詞的用法［名詞＋スル］とを取り上げた。古くプラス評価のみを表していたニホフは、中古に意味の下降が生じ始め、中世を通じてその意味変化が進行し、近世にはプ

ラス／マイナス両極の評価性を獲得するに至った。こうした意味・用法は、鑑賞としての対象をとる語・文章語（雅語）的な語として、プラス評価を表すという本来の評価性が必要とされ続けたというために成立したと考えられる。しかし、プラス／マイナス評価両方を表すという、相反する二面性を維持し続けたことで、近世以前においてはマイナス評価を表す語として広く定着するには至らなかった。そこで、日常語的表現として認識されていた［名詞＋スル］（主に［ニホヒ＋スル］）が、修飾成分を伴った表現全体でマイナス評価を表す形式として伸長していったと考察した。

第七章　ニホフの連用形名詞ニホヒの意味の下降

―カ・カヲリ・カザとの共存過程から―

第六章で扱ったニホフの連用形名詞ニホヒを中心に、カ・カヲリ・カザなどを含めた嗅覚表現名詞の史的変遷を追った。古く、プラス／中立的／マイナスの評価性を有する中心的な嗅覚表現名詞はカであったが、一音節という形態的な不安定さゆえに、中世後期頃を境にニホヒと交替したということを指摘した。近世以降、カが［色香］［移リ香］［梅ガ香］といった複合名詞・慣用的表現として定着しながら文章語として確立し評価性がプラスに傾いていったこと（意味の上昇）と、ニホヒが一語でプラス／中立的／マイナスの評価性すべてを担う中心的な嗅覚表現名詞として認識されていったこと（意味の下降）とは、そうした交替を物語る。また、カヲリは文章語（雅語）として、カザは上方語として、一部の位相にとどまりながらも、嗅覚表現名詞語彙を構成していたことにも触れた。

第四部　自動詞Ⅱ　カヲル・クンズの文章語としての表現価値の確立

第八章　カヲルの雅語化

―和語表現［風カヲル］と漢語［薫風］との関係を中心に―

カヲルとその慣用表現［風カヲル］、それと関連があるとされてきた漢語［薫風］を取り上げた。春・夏の二季にわたり、〈天下太平〉をも表していた中国語［薫風］は、そのままの意味で上代日本語に受容された。しかし、中世に至ると、禅文化の興隆とともに「薫風自南来」や「南風之薫」が［薫風］の代表詩として認識され、これらの詩における［薫風］の意味〈夏の風〉が強く意識され始めた。この［薫風］は、和漢聯句の場などをはじめとして連歌師にも吸収され、ここで、［薫風］とは別に誕生した和歌中の［風カヲル］という和語表現の出自が［薫風］に求めら

れるようになった。こうした過度な語源意識は、連歌が和歌同様に漢語（出自の語）を排除する傾向にあったことの結果と考えられる。［薫風］を中国語の文法構造そのままに訓読した［カヲル風］が見えず、［風カヲル］の形しか見出せないことは、上述のような意図的な訓読がなされた可能性を示すと考えられる。また、この語源論誕生の背景には、カヲルが他の嗅覚表現自動詞との棲み分けを図るように文章語（雅語）として定着しつつあったこと、つまり、当時の嗅覚表現語彙の在り方が［薫風］の訓選択に影響を及ぼしていた可能性がある旨を述べた。

第九章　クンズによる「非日常性の演出」

―漢語系文章語という文体的意味から―

第六章のニホフ、第八章のカヲルという和語動詞とは趣の異なる漢語サ変動詞クンズを扱い、その文体的意味から対象的意味を統一的に理解できることを主張した。クンズは、和漢混淆文が誕生に向かう中で誕生して以来、文章語が多用される和漢混淆文資料に多用され続けてきた。このことから、クンズの文体的意味は、古代より一貫して硬く重々しい印象を与える漢語系文章語であったと言える。また、クンズがその文体的意味ゆえに「非日常性の演出」に利用されたと考えると、中世以降に身体（超越性）の描写に多用されるようになったことや、マイナスの評価性をも有し得たという対象的意味を統一的に説明することができると指摘した。すなわち、身体（超越性）の描写における「非日常性の演出」には、硬く重々しい印象を与える文章語が必要であり、そこでクンズが重宝されるようになったのである。［異香クンズ］という固定的表現が身体（超越性）の描写に特徴的に現れることからも、この描写において「非日常性の演出」が行われようとしていたことが分かる。そして、マイナスの評価性を有するクンズは、いずれも異常事態における悪臭の描写における用例であることから、これらも「非日常性の演出」のためにクンズが利用された例と見ることができるのである。

結論

第一章　嗅覚表現語彙の史的変遷

本論の成果である嗅覚表現語それぞれの語史を総合し、嗅覚表現語彙の史的変遷という語彙史の問題について記述を進め、当該の語彙の古代性・近代性について考察した。

論述は、意味を構成する情報である、㈠文体的意味、対象的意味（㈡評価性・㈢対象）について順に行った。〈（～の（快い／不快な））におい

がする〉という意味における語同士の棲み分け＝語彙の全体像を明らかにすることは、本研究の第一の目的である「(一)嗅覚情報の性質・状態を言語化するためにどのような語彙が必要とされてきたか」を究明することに繋がる。また、対象的意味のうち、対象の全体像を明らかにすることは、嗅覚表現語彙が〈(～の（快い／不快な））においがする〉という意味以外に表す意味、つまり、「(二)嗅覚表現語彙がどのような事物・物事の描写に使用されてきたか」という本研究の第二の目的を検討することに繋がる。

まず、時代が降るにつれて各語の文体的意味が確立し棲み分けが進むことを踏まえ、㈠文体的意味の古代性は〝文体的意味の未成熟〟であり、近代性は〝文体的意味の成熟・分担〟であると考察した。

次に、評価性別に語の出現時期の傾向が見出せることを踏まえ、㈡評価性の古代性は〝プラス評価を表す語の豊富さ〟であり、近代性は〝マイナス評価を表す語の増加〟であると指摘した。

そして、近世以降の嗅覚表現語彙が、気（精彩・煙霧）や身体（美しさ・超越性）といった視覚表現語彙と共有する対象を手放していくこと、また、焦げるにおいに関わる語が増加することを踏まえ、㈢対象の古代性は〝視覚表現との機能の重複〟〝一語の意味が総合的〟であり、近代性は〝視覚表現との機能の分化〟〝一語の意味が分化・特殊化〟であると結論づけた。

さらに、特に嗅覚表現形容詞について、対象の拡大に見られる意味変化の方向性を指摘した。すなわち、感覚を通して認識した具体的な事物、の客観的な属性を表すことを職能としていた状態形容詞が、抽象的な物事、を対象とすることで主観的な感情・評価の付随する評価形容詞としても振る舞うようになるという変化の共通性である。これを踏まえ、㈢対象から見た嗅覚表現形容詞の古代性は〝状態形容詞としての存在〟であり、近代性は〝状態形容詞から評価形容詞への変化〟であると主張した。

第二章　成果と課題

最後に、嗅覚表現を語彙研究・歴史的な研究の対象として考察したことで得た成果を述べ、また、本研究が他の領域の研究とどのように連携するかについても触れた。そして、今後の課題について明らかにした。

はじめに、嗅覚表現を語彙研究の対象として考察したことで得た成果について述べた。日本語研究全般においては、ある語を常に、何らかの部分語彙（さらには日本語全体）の一部に位置づけながらその意味・用法を考察するという、〝部分―全体の意識〟、すなわち、語彙の観点が

重要と考える。これにより、ある語の変化が、個別的な事象に留まるか（、加えて、その変化の独自性を担保する特徴とは何か）、あるいは、類例のある事象で部分語彙（さらには日本語全体）に普遍的であり得るか、などの議論へと発展させることができるからである。

一例を挙げれば、カウバシの意味変化がある。本研究では、〈焦げる不快なにおいがする〉さまを表す形容詞～クサシの増加現象に目を向けることにより、個別的な現象に見える形容詞カウバシの意味の限定化が、嗅覚表現語彙において〝焦げるにおい〟に関わる快／不快形容詞の需要が増したという、部分語彙の一傾向であったと指摘した（本論第一部第一章）。本研究はまさに、〝部分―全体の意識〟から成る、日本語学における語彙研究の重要性を体現する研究として意義を有すると言えよう。

さらに、本研究は、語彙史を構築する一手段として、部分語彙の記述の積み重ねが重要であることを示したものとしても意義深い。すなわち、感覚表現語彙の部分語彙である嗅覚表現語彙は、到達すべき「全体」が想定しやすいだけでなく、次に述べるような、部分と部分との共通性が興味深く観察される点においても、語彙研究の対象として理想的な語彙なのである。

本論を通して明らかにしたように、嗅覚表現語彙と他の感覚表現語彙との間には、いくつかの共通性が見出せるのであった。《発散》の描写においては視覚表現語彙と、《内部感覚》の描写においては味覚・体内感覚表現語彙と、それぞれ類似することを指摘してきた。これは、嗅覚表現語彙が、嗅覚を通して認識した対象（体外の事象）の属性を表すという側面と、嗅覚を通して認識した対象に対する内部の生理的反応（体内の事象）を表すという側面との両面を有することに起因しよう。つまり、感覚表現語彙には、少なくとも次のような二つの側面が指摘でき、嗅覚表現語彙はその二側面を有するがゆえに、複数の感覚表現語彙との共通性が認められるのである。

一、対象（体外の事象）の属性を表す

（例、嗅覚・視覚・聴覚表現語彙）

二、対象に対する内部の生理的反応（体内の事象）を表す

（例、嗅覚・触覚・体内感覚表現語彙）

そして、嗅覚表現語彙のように二側面を有する部分語彙を中心に取り上げたからこそ、感覚相互の結びつき（部分語彙同士の関連）を明確に

示すことができ、今後取り組むべき感覚表現語彙という「全体」の概観が可能になったのである。

次に、嗅覚表現を歴史的な研究の対象として考察したことで得た成果について述べた。歴史的な観点から語彙を考察することは、古代語から近現代語へ向かう中で日本語が保存してきた側面、または、放棄してきた側面を総合した記述を可能にする。これは、〝日本語の歴史の現在〟である現代日本語の語それぞれの存在価値・存在理由を説明することに繋がると考える。

例えば、本論第二部第四章で触れたように、現代語の観点から～クサシの表す意味を記述しようとすると、接尾辞 - クサシが表す嗅覚的でない意味（例、面倒クサシのクサシ）と、合成形容詞～クサシが表す嗅覚的でない意味（例、青クサシにおける〈未熟だ〉の意味）とが同次元に扱われることになる。しかし、これを歴史的な観点から捉え直すと、接尾辞 - クサシの表す嗅覚的でない意味は、〈～の不快なにおいがする〉という本来の嗅覚的な意味が抽象化した結果の〈～の不快な雰囲気がする〉であり、比喩的な転義として嗅覚的でない意味を表す合成形容詞～クサシとは区別すべきことが分かる。また、現代語では唯一、照レクサイが評価性の後景化した語のように見えるが、歴史を遡れば、旨クサシという語の存在も認められる。そして、評価性の後景化が、《におい》に関わる語（旨クサシ）においても、《雰囲気》に関わる語（照レクサイ）においても同様に起こったことが明らかになるのである。

こうした現代語成立の背景を究明する歴史的な研究は、共時的に深く掘り下げた考察を行う現代語研究の成果と関連づけることで、より正確な日本語の姿の記述に繋がる。特に、本研究のように上代から近代に至るまでの長い時代を対象とする歴史的研究であれば、一層現代語との繋がりが意識される。ただし、現代語のように言語資料の豊富でない時代の日本語を、現代語に連続するものとして扱う場合には、残存する当代の言語資料を可能な限り多く調査する必要があろう。本研究では、そうした課題も越える網羅的な調査を行ってきた。また、網羅的に調査する中でも、言語資料のジャンルや文体に配慮し、語の意味の一側面である文体的意味についても着目した。つまり、本研究は、歴史をより長く・言語資料をより多く調査し、語の意味を多面的に考察したものと呼べる。こうした特色を有する歴史的な本研究は、「より正確な日本語の姿の記述」に寄与するものである。

さらに、本研究の成果は、複数の他領域の研究と連携できる点にも見出される。

第一に、本研究全体がそうであったように、形容詞や動詞といった品詞を越えて語彙を想定することで、語彙史は文法史と深く関わっていくことを明らかにした。また、本論第三部第六章で扱ったニホフと［名詞＋スル］とのように、単純一語のみならず分析的な類義表現にまで視野を広げることで、語彙史が表現史に発展していく可能性を示した。

第二に、本論第一部第一章におけるカグハシとその転化形二つの考察を通して、音韻変化による原形―転化形の別語意識の確立とそれに伴う語の意味変化という、語彙史と音韻史との密接な関係を改めて検討した。

第三に、本論第二部第六章において水クサイの意味変化を論ずるにあたり、文献調査だけでは十分に得られないデータを言語地理学の成果から援用し、通時的・共時的に広がりのある語彙史の記述を可能にした。

第四に、本論第四部第七章で和語表現［風カヲル］と漢語［薫風］との関係を取り上げたことで、語種を越えた語彙史の在り方を示した。漢語の日本語における受容の側面のみならず、中国語における史的様相にまで考察を及ぼすことができれば、日中対照研究にも繋がっていく。

今後は、如上の嗅覚表現語彙の共時的な意味の広がりをより巨視的に捉え、部分語彙から全体語彙の記述へと進めていく必要がある。特に、一つの感覚表現語彙の特徴を他の感覚表現語彙との比較の中で浮かび上がらせること、また、感覚表現語彙全体としての変化の傾向やその古代性・近代性について検討することが大きな課題となる。また、そうした意味分野語彙史の研究を進めるとともに、従来困難であると考えられてきた〝語彙史を説明する原理〟を追求し、語彙史研究を支える理論の構築を進めていかねばならない。